

# かわらない道



海の

## かわらない道

---

いつも、散歩道は決まってる。

相方のあいつがドアの近くまでくるのをまっててやって、ドアをあけさせる。

エレベータの中は静かにしておく。下におちてく感覚も上にのぼる感覚もなんだかムズムズして、おちつかない。だがしかし、ここで暴れたりしたら、せっかくの散歩は台無しになるし、何より楽しみにしてるあいつが可哀想だ。

だから、じっとして、待つ。

今日は雨だから、レインコートをきてやった。

いつもの散歩道も少しゆっくりめに歩く。あいつは相方のくせに俺の隣で、パタパタ歩いている。傘の中にも雨が入り、あちこちが濡れている。足の運びが悪いからなのか、泥まではねて、まったくいつまでたっても散歩の仕方がわからないやつだ。

「よっ」

いつもの猫だ。雨だから、つつじの中の繁みにひっこんでいる。俺はすばやく目をやると、無視してやった。こいつに会うと、相方は

「きゃー、可愛い〜」

といつもより、より高い声で叫び始める。

そんなときは仕方なく、あいつが落ち着くまで、大人な俺がじっと待っている。

時々、じいちゃんやばあちゃんにも会う。お互い知り合って長いから、会話も

「元気？」

「元気だ」

「元気でいろよ」

で済んでしまう。

ああ、でも、まだ俺には子供がいないから、子供は苦手だ。

ギャンギャンガヤガヤ

五月蠅くて...

ぴょんぴゅ〜ん

じっとしていることがない。

あんまりうるさいので、ちょっと逃げてみたり、蹴飛ばしてみるが、全く動じない。

まあ子供ってヤツはあれだ。エネルギーの使い方がわからなくて暴走する宇宙海賊みたいなもんだらう。

ん？突然「宇宙海賊」なんて言葉が出てきて、びっくりしたか？

それはあれだ。相方がそういうのが好きだから、いつの間にか俺も覚えてしまった。というヤツだ。

そうそう、散歩の話だった。

何回も通いなれて、毎日色々な花が植えてある角のうちが、こないだなくなっていた。俺はいつもと違う匂いに「おや?」「空っぽだ」「椿が泣いてるようだ」なんてことを思いながら、毎日毎日横を通ってたのに、家がなくなるまで気づかなかった。

いや、気づいていたのに「そうなら嫌だな」とも思ってたからだ。

いつもならカレーライスや煮物、焼き肉や春なら桜、朝顔と沢山の花があって、あの家の前が相方と俺の折り返し地点だった。かわらない毎日というのが、日頃相方のいう『幸せ』というものかもしれない。

空っぽになって雨の降る中、俺たちはやっぱりそこで折り返した。

散歩道はいつも決まってる。

ただ、見てないふりをすると、急に道以外が変わっていく。

俺はそんな厭きっぽい人間たちと、ただ毎日散歩するだけのために、散歩する。

終わり